

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』第十八卷「人文科学（一の八）」

民俗学、民族学、文化人類学、文明・宗教の発祥・展開と人間の発達
(一)

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第十八巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、民俗学、民族学、文化人類学等、とりわけこれらと人間の発達過程および岩崎個人の成長過程との関係の考察に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳〜十九歳

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 喪失した共感覚

チンパンジーの子どもはヒトに勝る記憶力の持ち主

私の共感覚とオスザルの感覚

対女性共感覚に関する一考察（1）「科学哲学的に」

対女性共感覚に関する一考察（2）「人体観」

対女性共感覚に関する一考察（3）「音韻構造から」

今年の目標&対女性共感覚

「花」&少し説明（対漢字共感覚の男女比）

共感覚と読字障害は表裏一体である

第二部 僕の共感覚を理解していただく上で

第三部 対女性共感覚

第四部 私の仮説「共感覚原帰属性仮説」

第五部 乳幼児総共感覚者説

第六部 日本的共感覚人間学（仮称）とは

第三編 三十歳〜三十九歳

第一部 直観像記憶と共感覚

第二部 「直観像記憶と共感覚」のページ

第三部 直観像記憶と言語知能のトレードオフ仮説

第四編 四十歳〜四十九歳

第五編 五十歳〜五十九歳

第六編 六十歳〜六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 喪失した共感覚

二〇〇五年三月八日 起筆

二〇〇五年三月十五日 公開

二〇〇六年五月四日 更新

二〇一四年七月十五日 更新

二〇一七年三月十三日 最終更新

特設サイト「知覚・共感覚」

持っていない共感覚が無いと言えるほどの多くの共感覚を持つ私にも、幼少から今までに失ってしまった共感覚があります。それを挙げておきます。

●共感覚による計算能力

小学二年生の頃、算数の授業中に先生から「サイコロ（立方体）の展開図を全て見つけましょう」という問題が出されました。この問題を僕が共感覚によって二分弱で解いて先生のところまで持っていき、十一通りの全てが正解だったため、そのご褒美として、残り

の時間はクラス全員が休み時間となりました。この思い出は、自分の共感覚が人から愛された嬉しい思い出の一つとして、今も自分の中に残っています。

自分がこの問題をどうやって解いたか、載せておきます。

（始め）

立方体の面は六つある

← 共感覚色に変換



← 漢数字に変換・・・「三六五八六九五八二九四七」

← 再度共感覚を使い、これらを並べ替えてできる二文字の大和言葉

に変換・・・「あす（明日）ひと（人）あか（赤）むら（村）と

き（時）しほ（潮）こひ（恋）よる（夜）はな（花）さき（先）

うみ（海）もり（森）」

← さらに並べ替える・・・「きとらとりきしるはあみもこほすひうひ

さなあよかむ」

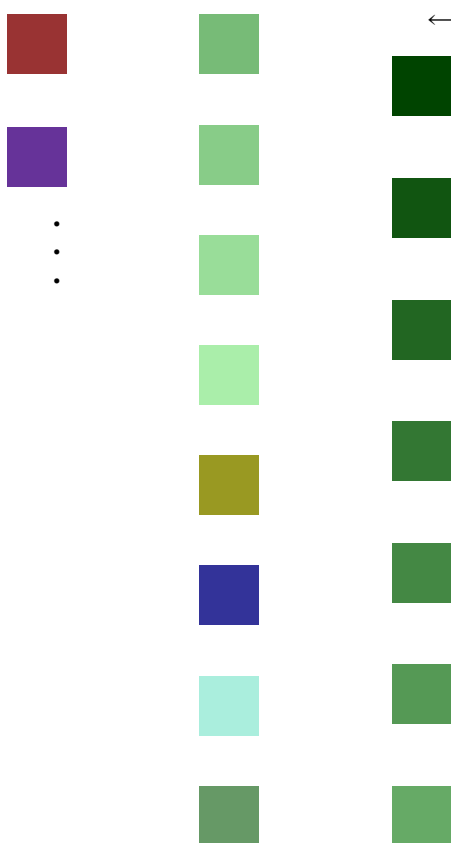
← 何度かつなげる・・・「きとらとりきしるはあみもこほすひうひさ

なあよかむ・きとらとりきしるはあみもこほすひうひさなあよか

む・・・」

← もう一度漢数字に変換・・・「五五五五五五五五七三二八二

六・・・」



←最初の十一個だけが美しいグラデーションを呈する

←立方体の展開図は十一通りである

(終わり)

今自分が見ても「一体何がどうなっているんだ」と思うこのよう
な計算方法は、幼少期には全ての人が持っているものでしょうし、
それが成人しても残っているような人はサヴァン症候群と呼ばれ、
現在、この呼称を与えられている人は世界に数十人しかいません。
(共感覚者のダニエル・タメット氏、キム・ピーク氏など)
私の場合、日本人にしかあり得ない解き方をしているのが特徴だ

と思いますが、成人してから、このような能力をもの見事に失い
ました。しかし、個々の数字の共感覚色だけは完全に残っています。

十八歳頃からは、四則演算については、ほほ他の現代日本人と同
様の数概念による抽象的思考で解いています。簡単な計算は、今で
も共感覚演算で行いますけれども。

ちなみに、有名な共感覚者ダニエル・タメット氏は、数字を以下
のリンク先のような風景として見ているそうです。

◆ダニエル・タメット氏の数字についての共感覚

氏の「 $53 \times 131 = 6943$ 」の計算方法も載っています。まず、 53 と
 131 をそれぞれの共感覚色・共感覚形に変換し、その間に出現する
共感覚色・共感覚形が 6943 の色と形をしてるので、答えは 6943
だということだ。

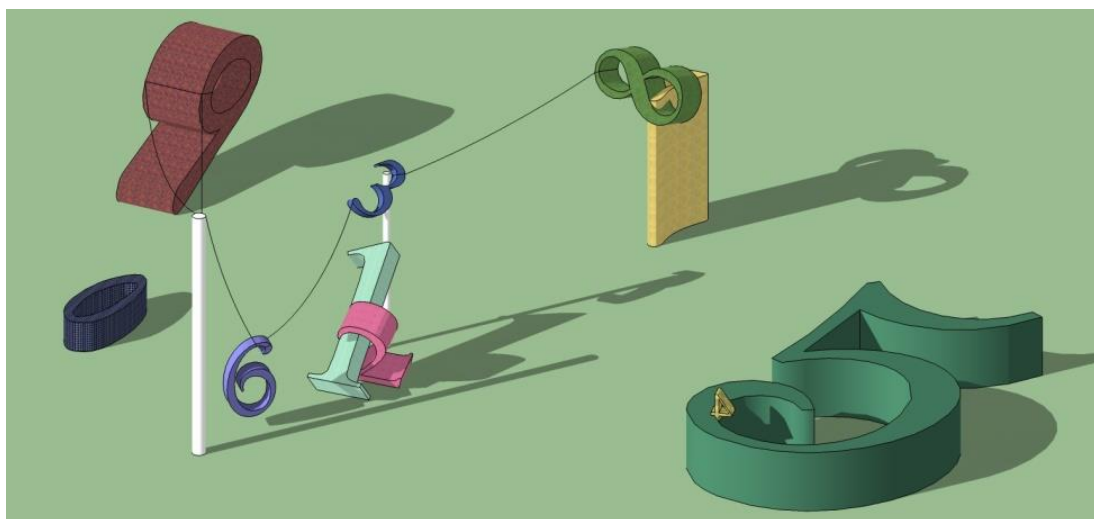
ともかく、「最初の十一個がグラデーションだから、答えは十一通
りだ」という先の私の主張と同じようなものです。ただし、アラビ
ア数字そのものは、元はインド・アラビア・西洋文明圏のものであ
り、今でも世界の数億人がアラビア数字を使用していませんから、
タメット氏の場合は、ある時代以降の西洋人、あるいは一部の近現
代人にしかあり得ない解き方をしているのが特徴だと言えます。

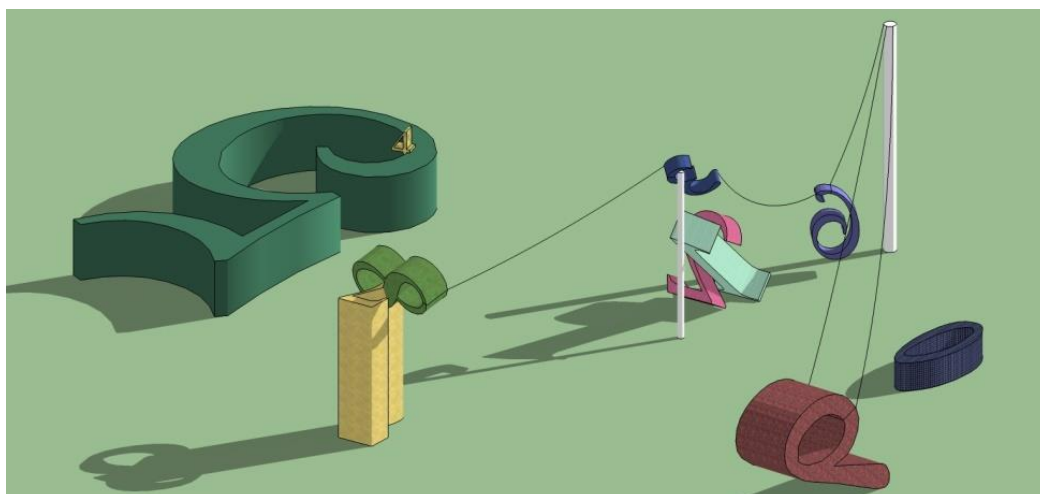
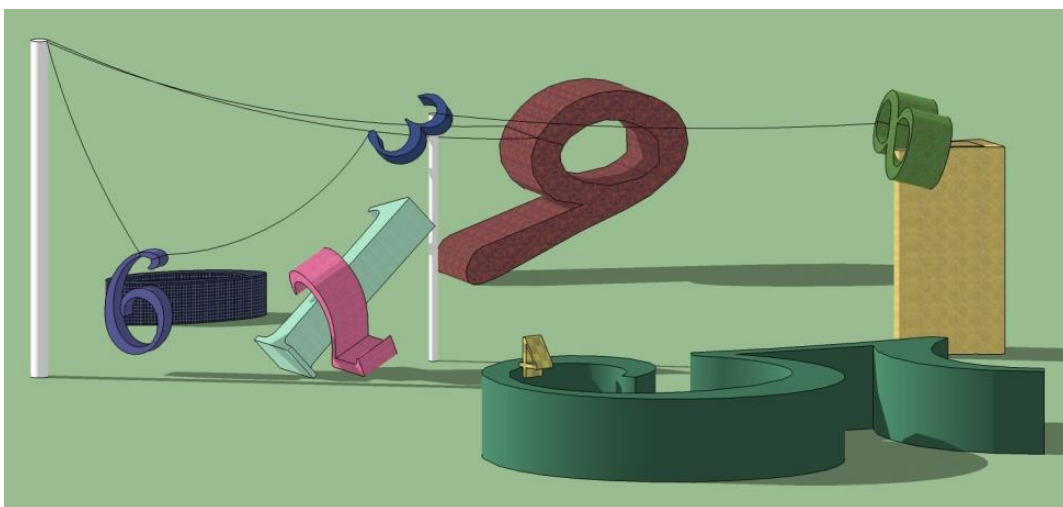
タメット氏の場合も私の場合も、生得的な知覚と後天的な識字能
力・思考との両方を図らずもフルアクセルで発揮してしまうタイプ
なのだと思います。

しかし、タメット氏の場合、私が失ったそのような共感覚的な演算能力を成人しても持っているのがすばらしいと思います。それどころか、円周率や外国語の暗記が極めて得意であるなどの、典型的なサヴァンの能力を見せています。普通は、早い人は三歳や五歳あたり、遅い人でも十代・二十代のどこかで、このような能力は急速に衰えてしまいます。

以下は、二〇一二年九月十四日時点での、数字についての私の共感覚です。

◆共感覚立体画像（二）「数字についての共感覚」





それから、共感覚教育を我が子に施したいと考えている世のお母さん方から、しばしば「共感覚を使って一流大学に受かる方法はありませんか？ どうすればウチの子にも共感覚の才能が身に付きますか？ よその親子よりも特殊な天才性で一步リードしたいです」といったご質問・ご相談を頂くのですが、残念ながら、人間にとって重要なことはそういうことではないと私は考えています。

入試に受かるために必要なことは、「勉強ができること」や「教養があること」ではないと思います。「学業の成績がよいこと」です。そして、「その学校の入試問題の癖に媚びること」、そして、「どんなに特殊な人も、同時代の受験方式の常識に合わせること」です。

先の私のような回答を書いたら、誰よりも先に答えが分かっていたとしても、入試という「法」の中では「違法行為」になります。「合法的に」一流大学に入って共感覚を思いきり研究したいか、一流大学に最初から入らないか、などを子どもに自由に選んでもらうか、まずは親・大人が自分で大学の運営者になって、共感覚の子どもたちを特殊能力試験や面接試験で合格させる入試方法を整備するかの、どちらかしかないと思います。

●共感覚による強い排卵感知能力

思春期を少し過ぎたくらいまでは、女性の排卵を感知するのに、

目視を必要ともしませんでした。どういうことかと言うと、衣服を着た排卵期の女性がそばを通っただけで、自分が女性とは別の方向を向いている場合であっても、排卵を把握できたという意味です。また、周辺の何人かの女子生徒が初潮を迎えたのも、共感覚で見えました。

この共感覚と閃輝暗点が併発したときには、すぐに保健室に行って寝込んでいました。見えているものは美しいのですが、身体はかなりの消耗を伴うためです。

その後は、排卵感知能力だけが衰えていき、今では排卵感知よりも月経感知のほうが頻度が相対的に高くなり、おまけに排卵感知にも月経感知にも、ほとんどの場合は目視を必要とするようになっていきます。排卵というのは、全ての過程が女性の内性器の中で起こることですから、到底、普通の五感では感知不可能であることは明らかです。

一方で、月経は、「外界」に近い部分で起こることですし、何より排出物を伴いますから、極端に言うと、無難な五感でも感知できます。つまり、私とて、次第に「共感覚←五感」という変遷過程を辿っていることは明らかで、さらに月経感知能力も昔よりは衰えてきています。

（もちろん、一般の男性は、衣服を着た女性の月経もあまり感知できないようですから、その点では、私の共感覚は今でもいわば「驚異的」なのかもしれません・・・。）

なお、女性に対する類似の共感覚をサイトで告白されていた男性

には、私以外にもN2氏などがいらっしやいましたが、残念ながらどのサイトも閉鎖されました。

<http://www1.coralnet.or.jp/nobuyosi/> : N2氏の共感覚サイト

チンパンジーの子どもはヒトに勝る記憶力の持ち主

二〇〇七年十二月十一日 起筆、攔筆、公開

1234567890

チンパンジーの記憶力の実験↑↑

<http://www.afpb.com/article/environment-science-it/science-technology/23212672427940>

興味深い実験。これこそ、共感覚者と非共感覚者との間で結果に著しい差が出るのではないかと思う。共感覚者が単位時間当たりで得ている知覚情報が一般の人よりも多いとすれば。

例えば僕の場合、数字の大小に意識を向けなくても、数字の「1、2、3・・・」に知覚する色を順番に並べていけばよいことになる。僕にとっては、数字は「から順番に、「薄い水色、緋色、藍色、黄色、深緑色・・・」なので、その色の順番に押しつけていけば、つまりは「1、2、3、4、5・・・」と並んでいることになる。と、今こうして入力している「1、2、3、4、5・・・」にも、すでに色を知覚している。僕の場合、数字はアラビア数字でも漢数字でもサイコロの目でも、色は変わらない。もっと言うと、「リングゴが三つある」という事象、その事象・出来事の「色」が、青色・藍色なのだ。（そもそも「数」なる概念を、「いち」や「に」という記号性と抽象性の手前の段階で、頭の中では色の具体性で思考している。言い換えれば、数の大小・多少を色で把握している。だから、僕にとっては「2+3＝緑」とも、「8-6＝赤」とも言えるのです。）

ただし、日常生活において一人で落ち着いて共感覚を發揮しているときとは違って、いざ実験の場だと、いらぬ緊張なり周りの状況があるから、分からないが。ひよっとしたら、気が散って、平均より遅い可能性もある。しかし、数字として見るよりは、やはり共感覚を使って数字という概念を捨ててみたほうが、速いだろうという予

想は付く。

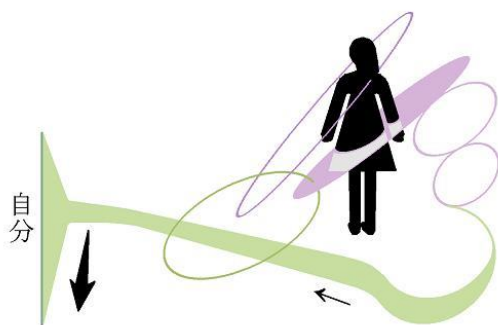
それにしても、僕は数字についてもこれだけの強固な共感覚を持っているながら、サヴァン症候群的な数字の処理能力はなく、計算能力についても一般の非共感覚者と同様であるのが不思議。

ただし、「レインマン」という映画があつて、マッチ棒が箱からバラバラと落ちた瞬間に「何十何本！」と答えているシーンがあるのだが、あれについて、僕の周りの人が「どうしてあんなことが分かるんだ。」と言っているところに、僕が「おそらく、マッチ棒の落ちた角度がことごとく色で見えたり、音で聞こえたりしてるんだよ。それを、いくつの音から成る和音か、といった具体的な情報のまま、言語化・記号化しないで動物的にとらえているわけで、見たまま聞いたままを言えばいいから、この人にしてみれば簡単でしょ。」と言ったら、どうやってそのことが分かったんだと驚かれたことがある。どうやってと言われても、つまりは僕がそういう感覚の持ち主に近い感覚に生きているから言ってみただけなんだが。やはり、こういった発想が出てくる脳や体の「座」と言うか、思考の行われる土台のようなものが、根本的に僕と他の人とで違うのは確かなのだろうけれど、しかし、実際の日常生活で使うような計算能力は、ごく普通だから、ますます不思議だ。それにしても、レインマンみたいな男が、二・三人は友達にほしいのだが。

要するに、このチンパンジーも、数字に色を見たり音を聞いたりしているだけなのに、それを人間（研究者）から見れば、記憶の”速さ”として映っているだけだと思ふ。チンパンジーに言わせれば、「俺はいたって普通だよ。」と答えるだろう。

しかし、チンパンジー君から見れば、僕の感覚も、しょせんは「人間様」の範疇なんだろうな。実は、そういうことを思うたびに、一瞬はブログを書く気を失うわけだが・・・。チンパンジーや他の動物から見れば、僕の文章はものすごく当たり前の、たいしたことではないことを、わざわざ言葉にしてしゃべっているだけなのだ。ところが、一般の非共感覚者から見れば、僕は別世界のことをしゃべっている人間ということになるのかもしれないが。

動物を目の前になると、結局は僕のような共感覚者も、”偉大で愚かなホモ・サピエンス様”の片鱗を担っているのかと思つて辟易することがある。もし僕のブログを読んでいるチンパンジーがいたら、「こいつあ、つまり人間のオスの典型例だな。」ぐらいのことは思っているかもしれない・・・。って、読んでいないか。しかし、自分の共感覚を使って、チンパンジーやオランウータンと対決してみたい気はする。



(関連する記事)

<http://ij-art-music.sblo.jp/article/5604599.html> (最後の質問と返事のこと)

私の共感覚とオスザルの感覚

二〇〇八年二月二十日 起筆、攔筆、公開

女性の性周期が十メートルくらい離れたところから分かることがあるという私の感覚は、数ある私の共感覚のうち、自分でも最も関心のある感覚である。正確に言うと、私が見た女性が、女性としての使命である1か月の波の中のどの位置にあるかということが、分かることがあるものである。しかしよく考えれば、これは実際に女性が発した化学物質なりホルモンの変化か何かを私が感知していると言え、簡単に説明が付くのであって、もし私が情報提供したならば、いずれ科学の力が解明するだろう。ところが、「音に色が見える」とか「文字の形に色が見える」といった、すでに人口に膾炙した一般的な共感覚のほうが、案外、科学的に説明しにくいし、人から理解されにくい。これはけっこう皮肉である。十メートルとは言っても、いつでもどこでも分かるわけではなく、誰に対しても分かるわけではないし、普段は黙っておくというのが私の信条である。それに実は、「この私の美しい感覚が科学で説明されてたまるか」という思いもあることは否定できない。

異性に対して外から何も感知できなくても種の個体数を保てる文明社会に生きる人類のオスは、他の動物と比べて感覚が異常に矮小化した事態にあることは間違いない。私の感覚が他の動物のオスが持っている感覚と変わらないという私の直観と確信は、そのへんから出ているだろう。日本では、江戸時代までは大飢饉・洪水・火山噴火は頻繁にあったし、村落の存続というテーマといつも隣り合わせだった。なにしろ、縄文時代の女性は、初潮以降すぐに妊娠・出産

を繰り返さないと、そもそもその村落の人口が保てなかったわけで、そういうときに男だけがボーっとして何も感じしないなんてわけがない。だから、つい数年前まで私は、十メートル離れたところから女性の体が発することの何一つも分からないという男がこの現代日本において圧倒的多数であることが、男として信じられないという思いであった。ただ私は、大脳皮質的な知能や言語能力は他の現代人と同じであるのに、どうして原始的オス能力も変わらず持っているのかというのが、不思議なところではある。

思うに、風土や宗教観の違いは、共感覚だけでなく、心理学への向き合い方にも影響を及ぼす。私は、私の見ている世界がほとんどオスザルかその他の霊長類、あるいは哺乳類のオスの感覚に近いというのは、もう直観しているのであるが、仏教文化圏でそれを言うとき、仏教自体が人間を離れた超越存在を認めない多神教的・汎神論的思想であって、「人間と動物は連続する」という自然観を延々と持っているから、私の感覚世界は実は「男の立派な感性」として存在している。ところが、一神教文明圏においては、何につけても真理があるのであるから、健常者の感覚が正しいということになってしまうと、そこからはみ出た者が「障害者」と言われる。明治の文明開化以降に、日本で「障害者」なる発想が生まれたのには、実はわけがあるのである。つまり、仏教や神道文化圏では、共感覚は「悠久の歴史」であるのに、キリスト教圏では「脳科学や心理学なる学問としての発見」でしかない。言い換えれば、ニーチェやキルケゴールのよう

に、ほとんど仏教の境地に達しながら世間から曲解された欧米圏の男というのは、ある意味では違う苦しみ方をした。彼らが一貫して言ったのは、「男は」人間性を持ったサル」に戻れ。現状は、人間性なき本能と、本能なき絶対真理への妄信あるのみ。」ということであった。

欧米の社会進化論は、簡単に「白人は黒人よりも動物から遠い。黒人は知能が低い。」などという傲慢な方向に行ったが、とにかく一つの真理を求めようとすると、必ず例外が出るのである。その例外を最初から取り込んで、「無」や「空」を語ってしまうのが、仏教や日本のアニミズムであった。私は、どちらが良いか悪いかを言いたいのではなくて、かつての日本の男が本来持っていた感覚をそのままに残して生きる男の場合、それは「私はサルの人間である」と自信を持って堂々と行ってよい、それが「男らしさ」なのだということである。共感覚者の女性も、「私の感覚は動物のそれに近い」と言う女性はいくつもある。

なぜ私が日本の男として、この自分の「女性生理現象感知」と付き合っていくのに、仏教の経典を読む必要性と美しさを感じるかということなのである。しかし、私の発想はまたそこから進んで、例えば、世阿弥の『風姿花伝』にどうして私が惹かれるかと言えば、それは世阿弥自身がそういう共感覚を持っている男であったから、『風姿花伝』を書いたのではないかと思うわけである。仏教では、

私は曹洞禅に惹かれてきたが、道元が『正法眼蔵』を書いたのは、あれは道元自身が女性の生理を遠隔から感知するとか、文字に色が見えるとか、音に色が見えるとかいう、共感覚的なものを持っていた男であるから、あのような思想に至ったのではないかと、そう思われるのが、私には興味深いのである。

対女性共感覚に関する一考察（1）「科学哲学的に」

二〇〇八年七月二十七日 起筆、攔筆、公開

「文字に色が知覚される」、「音に色が知覚される」などの一般的な共感覚者の多くが、「他の人にもこの感覚があるものだと思っていた」と告白する。それが次第に、他人とのギャップに気付くようになり、そのうち「どうして私だけがこんな感覚を持っているのだろう」と悩むようになる。僕が持つ対女性共感覚も、決して例外ではない。男には皆あるものだと思っていた。しかし、これは実のところ正しい直観だったのであって、動物の一種であるヒトは、子どもの頃は皆、そして、かつての男は皆、僕が持つような共感覚を持って生きてたであろう。僕の場合は、むしろ「文字に見える色」には個人差はあるだろうが、それよりも人間が生きるのに根本的な感覚であるべき「対異性共感覚」のほうこそ、男性同士で共有できるものだと思っていた。

前回も書いたように、僕は女性に色が知覚される共感覚を持っている。また、女性十人に一人ほどの確率で、その女性が今、月経周期のうちのどこに位置しているかが遠隔から衣服を通して色彩や音楽や形状で察知されることがある。そして、僕はその自分の感性を美しいものだと思い、なるべくなら失いたくないとさえ思えるようになった。一生をかけて研究したいとまで自分自身に思わせているもので、それを実践し続けているわけだが、それとは逆ベクトルに受け取られる、つまりは、好色目的で執筆しているととられることも無きにしも非ずであることに変わりはない。今思えば、例えば三島由紀夫は、一見男色だと思われるが、対女性共感覚は一般の男性を圧倒していたように思う。そのことが僕にとっては、本当に惜しい、あるいは懐かしいという気分になる。

この共感覚は、一見すると相当に特別で奇異な共感覚に思えるだろうし、そう思われるという現実には、他の男性との会話で経験上分かっているいはいるけれど、「女性が発した化学物質が服の上から感知できる男性が今もいるのだ」と説明すれば、「文字の形に色が見える」といった一般的な（かつ説明しにくい）共感覚よりも、あっけなく科学的に解明される可能性がある。「女々しい」あるいは「叙情的」と言われるのではないかと悩んできた僕の共感覚ないし感性が、実はいざとなると一番科学者の信頼を勝ち取れるのだという意味では、科学が必要であることは確かなのだ。ただし、僕が本当に追い

求めたいのは、そういうことでないことも、また確かだ。科学が何を解明しても、僕はやはり僕の共感覚を自分で問いつけるつもりでいる。

18歳ぐらいいからずっと感じてきたことで、今の個人的な日本語や世界の言語構造・音楽理論・絵画・人類史の研究などでも分かっていることだが、一般の男性の持っている感覚世界の総体がシフトアップした状態が、僕の脳と体では常時発動されている、と言えれば分かりやすいのだと、最近思う。一般の男性が女性と長いこと同居したり同居したりして初めて分かるようなことに該当することが、僕の場合にはちよつとしたことでも共感覚によって感知・把握されているという言い方でもよいかもれない。分かるものは分かるので、どうにもしようがない。おそらく、あらゆるメスに対してこの圧倒的共感覚を、僕どころではないレベルで維持しているのが、動物のオスというもので、今よりは動物に近かったかつての日本の一夫多妻制が、男の勝手な興味などではなく、むしろ複数の女性に対する圧倒的共感覚と真の愛情によって支えられていたことの証左になるだろう。従って、僕が持つ対女性共感覚と、世間一般的な記号的性欲というものは、絶対に峻別して語られなければならない。

なかなか日常では言いにくい自分の共感覚を色々と語っている僕ではあるが、僕のこの共感覚とその研究が、看護師経験や医学的見識のある女性、主婦の方々、大学で共感覚研究をされた同世代の女性、

同世代の共感覚者の女性の目に触れているということは、それだけでも十分、僕が自分の共感覚を堂々語っていく勇氣や根拠を与えられた気分である。

そうやって今までにも、色々と女性の方々からメールを頂いたが、少し女性の皆さん自身にも考えて頂きたいと思うことがないわけではない。女性が僕の共感覚を分析するに、「僕が、普通の人間が感知しないエストロゲンなり、経血や月経前の粘液などの分子を、女性の衣服の上から感知しているのではないか」とのご意見が多いわけだが、それはそれで、もちろん、重要な一説ではあるものの、僕としてはもう一歩踏み込んで考えているというのが事実だ。

共感覚者の女性には実感として分かると思うが、例えば、「文字に色が見える共感覚」を持つ人は、黒で印刷された新聞の文字にも、様々な色を言うことができる。僕もそのように知覚している。ただし、印刷された「黒」はいわゆる「色 (color)」と知覚されるが、共感覚者が言う「色」は、既存の「色 (color)」ではない、すなわち可視光線（電磁波）による色彩ではないと知覚されていることと思う。僕もそうである。

「音に色が見える共感覚」も、「いわゆる一般の人間が音波と呼んでいるものに、色彩を感じる」のでもなく、「音が音としてではなく、可視光線として知覚されている」のでもなく、「音波とも可視光線と

も違う、また別の名称を与えたい何かを私は知覚している」と主張したいのが事実だと思ふ。前回のブログ記事 (<http://ij-art-music.sblo.jp/article/17226219.html>) で書いた僕の「対女性共感覚」も、僕が女性について、月経などの女性の体内で起こっている生理現象を、普通の男性が当たり前だと思っている「音波」や「可視光線」で知覚しているのではないわけである。

そうなるとう度は、「僕が女性の月経を十メートル先から知覚している」とき、僕が女性に知覚しているものが本当にエストロゲンかどうか、科学者が当たり前のように客観的実在物として扱っている既存の物質や波動かどうか、という問いから始めなければならない。つまり、僕がいつも「かつての男性は皆、僕のように、女性に対する共感覚があった」と言うとき、「普通の男性にとっては、エストロゲンは外から感じられない化学物質だが、僕にはそれが外から共感覚（色彩や音楽）で分かる」なんてことを言っているのではなく、「僕が共感覚によって女性に感じているもの自体、語っている対象自体が、他の男性の哲学や科学、知覚や思惟の対象にはなっていない」ということなのであり、僕の対女性共感覚研究は、全てそこから始まったものである。

僕が女性に知覚しているものがエストロゲン「そのもの」でないことは、科学的と言うより、むしろそういった哲学的な言説によって簡単に説明できてしまう。十メートル先からエストロゲンを感知す

るなんてことは、僕が人間のオスである以上、また僕がオス犬でない以上、できない。共感覚とは、人間本来の知覚能力を飛び越えてはいけない。女性の方々のほうから、僕がエストロゲンを音や色で知覚しているのではないか、というご意見が出るということそれ自体が、すなわち、「男性が女性に感知するものは、エストロゲンやナントカ物質といった化学物質なんだ」という前提が現代社会の女性のほうにもあることを示していると思う。おそらく、こういったものの考え方を一旦覆してみない限り、共感覚研究は清く正しい方向に進まないだろうと僕は思う。下手をすると、僕が超能力を持っているなんてことになりかねない。そんなことはありえない。要するに、僕が持っているのは、あくまで男が持っていておかしくない感覚なのだということである。

そうであるから、僕が共感覚によって女性に知覚しているものは、物質や波とでも名付けたいものである。つまり、僕は女性の生理現象を判断するとき、ホルモンで判断しているのでもなく、音波や可視光線で判断しているのでもなく、僕の脳や体が知覚する或る共感覚によって、それを行っていると云える。ところが、エストロゲンや、その他女性が客観的に発しているとされる化学物質それ自体、科学者の男性の脳の範囲内で「発見」「発明」されたことであり、またそれが偶然にも全てのホモサピエンスのオスに、まるで実在物であるかのような共通観念として名指ししうる「収束性」を持つから、化学物質として成立しているだけであって、科学なるものは、

結局、全て「主観」なのである。従って、もし僕のような共感覚を脳と体に残している男ばかりが現代社会の男の大多数を構成していたならば、女というものそれ自体が、エストロゲンなどといったものではなく（あるいは、そればかりではなく）、A物質やB波やC光線なるものによって捕捉されるべき対象であったに違いない。

だから、人間の男性以外のオス（動物のオス）が人間の女性を見たら、エストロゲンやナントカ物質なんてものは、存在しない。音波も可視光線も存在しない。本来は、全ての自然科学は、こういった仏教的達観を大前提とすべきである。僕はそれに類するものを、人間の男の範囲内で人間の女に感じているだけだと言える。ただし、僕が感じているものは、動物のオスに比べれば、「今の人間のオス」がおしなべて持っている感覚に近いはずで、対女性共感覚を他の男性と共有できるはずなのに、他の男性とは、女性に対して知覚しているものが全く異なる。これはどういうことか。何がその落差を生むのか。

それはひとえに、人間が「記号的な言語を持った動物」だからである。日本人男性が日本語の良さを軽視して欧米語に走るようになったことが、日本人男性が対女性共感覚を失ったことの根本原因であるということ、科学的思考に終始する男性はなぜか認めようとしていない。むしろ、これを認めようとしていないは無意識のうちにて認めていない男性から順番に、対女性共感覚を失ってきたということ

とではないだろうか。僕はこういったことに物足りなさを感じて、ブログを書いたり、独自研究を進めていると言って良いかもしれない。ここから、日本語や日本の衣食住について、それから三島由紀夫の自決の意味の根本について、我々は真剣に考えていくべきだと思う。これは、本当は本格的な哲学（認識論や存在論）の幕開けでもあるのだが、本当の男性やオスの動物的能力を知ってもらうためにも、女性の皆さんにもぜひ考えてみてもらいたいことだと思っている。

対女性共感覚に関する一考察（2）「人体観」

二〇〇八年八月一日 起筆、攔筆、公開

（前記事からの続き）

今のイギリスを構成する民族のうち最多のアングロサクソンという民族（ゲルマン系）は、かなり昔から、人間の体をパツと見たとき、唇の赤い部分と、その周辺の部分（鼻の下やあごひげ・ほおひげの一部分）とが、別のパーツだとは思わない民族である。別のパーツだと思わないから、当然同じ単語で呼んだ。それを「lip」と言うわけだが、日本人の脳（ないし目・網膜）には、唇とその周辺が別のパーツだと映るばかりか、どちらかと言うと、唇の周辺とその

他の肌色の部分とが連続している同じパーツで、唇だけが浮いて見えるので、客観的に「あの赤い部分」なる実体があつて、それを「lip」と呼んだり「唇」と呼んだりするのだと思ひ込んでいる。（ただし、この「翻訳法」自体が、文明開化後の日本人にしか分らない外国文化の受容の仕方なのだろうけれど。） 「upper lip」が「上唇」に一致せず、和訳のしようがないのも、「上唇と鼻の下の部分とが、違う部分とは思われない」というアングロサクソンの知覚を考えれば、むしろ当然である。

ここで重要なのは、「別のパーツと思わない」というのは、「唇とその他の部分の色の違いが見えていない」とか、「日本人と欧米人とでは、我々が思う以上に網膜の構造に差がある」などという意味ではないということだ。そうではなく、「全ての人間の目（網膜）に見えていることでありながら、脳が知覚していないこと、頭で考えたことがないことが存在する」ということで、「それはしばしば、言語単位・民族単位で区切ることができる」という意味だ。

アングロサクソンが人体をそのような境界線で分断するようになったのはいつかと調べてみるに、「分断するようになった」と言うよりは、「私もあなたもそのように世界を知覚する」という共通認識が、同民族内で千数百年も前から大前提にある、ということなのである。ただし、厳密に言えば、「分断するようになった」のであり、日本人とアングロサクソンの知覚世界のどちらがもつと言語黎明期的・

原初的な性質を帯びているかと言えば、日本人である。ただし、アングロサクソンの祖先である原初のゲルマン民族は、江戸時代までの日本人のような人体観を持っていたようである。いずれにせよ、英語ができて以来のアングロサクソンの男性は、女性の顔をパッと見たときに、先のように知覚するのであり、その知覚がそのまま思惟や嗜好や恋愛に直結している。もちろん、今ではアメリカ英語が主流なので、イギリス英語のほうが「古き良き」やまとことば」に聞こえるくらいかもしれないが。

アングロサクソンの男性が日本人男性のような仕方では唇を知覚しないのはどうしてかと言うに、それには多くの理由があるということが、これまでの諸研究や個人的な研究でも分かってきたが、面白くかつ重要なものを挙げると、例えば、「その民族がよくしゃべるかどうか」ということと「唇をどうとらえるか」ということの間には、密接な関係がある。「lip」を正しく和訳すると、「アングロサクソンが英語をしゃべるときに動く部分の総称」ということだが、日本人女性は元来、あまりしゃべらなかつたので、日本人男性が「女性のダイナミック（動的）な部分の形状」によって女性の月経周期その他の生理現象を遠方から感知することは無理であり、従って女体を「ダイナミックに」分節化するという考えが日本人男性には全くなく、それを「スタティック（静的）な色彩」で分けるということが第一義に来る。事実、僕が1931年に書いた対女性共感覚の対象となつた女性のうち、唇の色彩と音楽とによって先のことが僕に知覚さ

れる女性がいるわけであるが、そのこと自体、僕の共感覚が極めて日本人男性的であることを如実に示している。この共感覚こそ、かつての日本語の「うつろふ（移ろふ）」や「あす（褪す）」が指し示していた知覚の代表的なものであらうと思う。今でも日本人男性が日本人女性を見たときに、唇を浮かび上がらせて知覚することは、僕が持つ「遠方から日本人女性の月経を感じする共感覚」が、まだ一般の日本人男性にもぼんやりと名残りをとどめていることを示すかもしれない。

「ダイナミック」か「スタティック」かというのは、別の見方をすると、人体または女体を「機能」や「実用性」でとらえるか「美観」や「芸術性」でとらえるかの違いでもある。世界中の女体語彙を見れば、文明国ほど、後者から前者への急速な変化が起こっている。またそれは、「ユーラシア的」か「南方ポリネシア的」の違いでもある。日本やポリネシアのような、隣の民族や国家と争いを繰り返さなくてよい非印欧系・非騎馬民族の言語では、女の唇は「機能」よりも「色彩」であった。こういった語彙を、非印欧・親アルタイ型の文法に乗せてしゃべるのが日本人である。

人体あるいは女体に対する知覚が民族単位で全く違うというのは、一般の日本人男性は、少なくとも英語を学び始めて以降に知覚することと思われるが、僕の場合は、周辺の日本人男性と、¹⁸日のような日本的共感覚を持つ自分とで、人体把握の仕方がかなりの程度違うと

いうことを、英語を知らない段階から自覚していた。ただし、先の唇の例のような、日本語に特有の人体把握の仕方については、一致しているわけだ。このことは、対女性共感覚を考える上で、無視できない重要なことのように思われる。

もちろん、唇に限らず、先のようなことは体の色んな部位の語彙について起こっている。そして、二十七日の記事で書いたような、女性の月経周期をエストロゲンなどの物質によって記号的に解釈するという行為は、唇と鼻の下とを峻別しない欧米語による思惟によって生まれたことと言うまでもない。鼻の下のみぞの部分は、解剖学的には「Philtrum」と呼ぶが、これはギリシア語由来であって、古代ギリシアあるいはプラトンよりも前の西洋世界は、日本人男性とほとんど同じ女体観を持っていた。日本人は、最初から唇と鼻の下を区別している。特に、江戸時代までの日本人にはごく自然の美観であったようなことが、欧米世界では解剖学的な「発見」であるような人体の部位が多い。女性の体については、特にそうである。

いずれにせよ、女性を「目視」したときに、唇とそれ以外を別の部位と知覚し、別の単語で呼称したくなる本能は、今でも、一般の日本人男性と、対女性共感覚を持つ僕との間でさえ、全く共通のものだと思われる。そうであるから、僕が「遠方から女性の月経周期が分かる」共感覚を持っていると言っても、例えば、「それを女の唇に見える」音楽や項（うなじ）に「聞こえる」色彩などによって判断

する、まさにあの「月経感知覚」をまず共有できる男性は、lipによってそれを判断しているであろう、英語を母語とする共感覚者の男性、あるいは欧米語を母語とする男性ではなく、実は日本人男性の中にまだいるであろうという期待が持てる気もする。

僕は当初、この「ステレオタイプな女性観の、無意識の深層における共有」が、二十二日や二十七日に書いたような自分の対女性共感覚を他の一般の日本人男性に説明する際に有効である可能性はないかと考えた。自分の対女性共感覚を、この「唇」の例と同様のもの、すなわち「民族間で起こっている共時的・通時的な知覚の落差が、同一民族の同性の中で起こっていることの一例」として挙げ、「日本人男性性」として「日本語において」再び共有できることはなかるうかと考えたわけだ。換言すると、自分が日本人女性に知覚し思惟していること、二十二日の記事に書いたようなことは、他の日本人男性にも「見えてはいるのだが、脳と体が知覚したことがない、考えたことがないにすぎない」ものだという前提に、あえて立ってみた。日本人男性が皆、僕が対女性共感覚と呼んでいるものを持っていたとすると、その共感覚の実態は、二十二日に僕が書いたようなものであるうし、そういったことが前言語的に日本人男性の脳と体に共通に認識されていたらう。むしろ、ずいぶん時代が下るまで民族レベルで対女性共感覚を維持しえた可能性があるのは、日本人男性であるように思われるが、今となっては、それこそ言語によって回想するしかないであろうし、やはり、二十二日の記事のような

具体的な実践を続けること以外に、日本人男性が主観と客観の区別を越えて本来的に持っていた対女性共感覚の真髄に迫る方法はないかもしれない。

また、先の「唇」の問題は、こうしてあえて言語化・記号化して説明すると、たちまち全ての男性の意識にのぼり、確実に理解されることであるわけだが、対女性共感覚となると、言語化によって伝達可能なものでないことは、僕の中では明らかになりつつあると感じる。換言すると、「唇」の問題は、人類だけが持つ言語それ自体が生んだ（他の動物のオスにおいてはほとんど種の違いに該当するような）民族間の知覚・思惟の違いを、日本語それ自身によって日本語の話者同士で理解し合う作業だから、認識は可能であるが、僕が持つ対女性共感覚というのは、「説明を試みること」が「現代日本語を離れること」にほとんど一致してしまうことになる。その壁を越える一つの光としては、もちろん日本の古語があるだろう。自分の対女性共感覚を現代日本語で完全に言語化することについては、諦めざるを得ないかもしれないが、少なくとも、他の動物においては異種間で起こる脳や体の差に該当することが、言語を持つ人間では同種・同性間で起こりうるということは、間違いないだろう。

対女性共感覚に関する一考察（3）「音韻構造から」

二〇〇八年八月七日 起筆、擱筆、公開

前回は、日本人男性全体に今でも残る「深層意識における特徴的な女性観の共有」をうまく用いて、僕の対女性共感覚を一般の日本人男性に対して説明できる可能性、及び、その原初人類的な女性観そのものが、日本人男性が世界的に見ても比較的後世まで対女性共感覚・月経感知覚を持っていたことを示す可能性を考えたのであった。今回は、「日本語の母音構造」の視点から、僕の対女性共感覚を少し考えてみたい。

「数十メートル先の女性の月経周期が、衣服の上から色彩や音動によって感知されることがある」といった僕の対女性共感覚が、自分が日本語話者の男性であること、あるいは日本の風土に生まれたことと極めて深い関係があるという、ある種の安堵感なり感慨に近いものを持てるようになったきっかけには、「ある言語の語彙全体に含まれる母音の量ないし開音節語の量は、その言語を話す民族のパースナルスペース（私有空間・個人空間）の大きさ（体積）に比例する」ことに気付いたことも挙げられるだろう。

日本語は周知の通り、「子音で終わる音節がない開音節言語」である。むしろ、厳密には、「ん」は「n」や「m」という何種類かの子音として分析でき、「こんぶ」というときの「ん」は、正確には上下の唇が一旦閉じる「m」であるが、日本人は「にんじん」の「n」と「い

んぶ」の「m」とを区別しないどころか、「ん」を「あ」や「か」と同等の音節単位ととらえる。これは縄文時代からずっとそうである。「にんじん」は日本人にとっては「に・ん・じ・ん」ととらえられており、決して「nin・jin」という二音節としてはとらえられていない。音声学等においては、日本語の「子音＋母音」を「モーラ」と呼んでおり、「にんじん」ならば「に・ん・じ・ん」の四つのモーラで構成されている単語である。文法は漢民族を除く周辺アジアと同じであるのに、音韻構造だけはこのように、日本海と東シナ海を隔てて周辺アジア（中国・朝鮮含む）と日本とで極端な差異が見られるものである。もっとも、日本語の母音の数については、奈良時代には∞個あったとの説を僕は支持しているが、いずれにせよ、子音で終わることがないという基盤は一切崩れていない。

今、ある人が、百メートル離れた地点にいる人に向かって「cap-」と叫んだとする。「p」は純粹な破裂音であって、百メートル先の人は「cat-」や「catch-」と聞き間違える可能性がある。「ca」の部分は、近傍で話すのと遠方から叫ぶのでは、圧倒的な音量の差があるが、「p」の音量はほとんど変わらない。それが英語を初めとする欧米語である。

しかし、「cap-」を、後ろに「n」を付して日本語風に「キャップ！」と言い換えてみたならば、たちまち百メートルばかりかそれ以上先からでも正しく「キャップ！」と聞き取れる。これを、距離の比を

変えずにそのまま近距離での会話に移して考えてみるとよい。この「距離感」ないし「距離の離れた話者同士で正しく情報を伝え合う」意識こそ、日本語が子音で終わる単語を一つも持たなかった理由である。換言すれば、日本語の「あ・い・う・え・お」の母音構造は、日本人のパーソナルスペース・話者同士の身体間に保たれるべき距離が、印欧系民族や大陸の騎馬民族よりもむしろ広いがために、おのずから生まれた母音構造である。あるいは、ある程度離れた距離において同じ情報量を伝えるのに、日本語は小声を使うことが可能な言語であるという言い方もできよう。もともと、僕自身はこの距離感を、「パーソナルスペース」という横文字ではなく、「可能的関係」という日本語で呼んでいる。なぜならば、「個」を「全」との対立概念ととらえる欧米は、見ず知らずの人にも社会的な割りに、肩が当たっただけで争いになるというような、「パーソナルスペースへの異質なこだわり」があるが、日本人の場合は、普段は人を警戒しつつ、懇意な人の場合はパーソナルスペースに引き入れるという、また別の風流があるため、そもそも日本人について「パーソナルスペース」との語を用いることが不適切と言わねばならない。

いずれにせよ、「cap-」と「cat-」の違いが聞き取れる話者間の距離が、「キャップ-」と「キャット!」の違いが聞き取れるそれよりも小さいということは、換言すれば、欧米人やアルタイ系遊牧・騎馬民族は、母音を追加して遠距離からでも聞き分けられるようにする必要を感じない「パーソナルスペースの狭さ」を持つがゆえに、

そのような言語が使えるのである。ちなみに、ある言語の語彙に占める母音の総量や、その言語を話す民族のパーソナルスペースの大きさ及び身体間に保たれるべき距離は、人口密度には全く関係がないことを確認した。また、例えばグルジア語という言語は、大量の子音の連続があることで知られるが、厳密にはあらゆる子音の直後に母音が発音されており、むしろ人類の言語黎明的な特徴を有しているし、母音と子音という尺度でとらえることが憚られる言語である。アイヌ語にもそのような傾向がある。そもそも、日本語は最もそのような性質を持つ言語なのである。母音と子音がセットになっているということは、母音と子音の区別が存在しないのと同義である。

僕が遠隔から女性の身体上にとらえているものは、「母音的・遠距離的 female 情報」とでも呼びたいものである。前々回、エストロゲンの話を出したが、エストロゲンは、閉音節欧米言語による科学の発展により見出された物質であって、「子音的・近距離的 female 情報」と呼称することができるであろう。本来ならば、日本人男性にとっては、日本人女性の体について遠方から知覚する何かがあるはずであり、エストロゲンとは別に、何か典雅・優美な和語によってそれを名付けることができたはずである。これを僕は今、便宜的に「母音的・遠距離的 female 情報」と呼んだが、そもそも和語の「にほひ」や「かをり」には、女の生理現象を共感的に感知する知覚自体を指す形跡があつて、追懐の情に堪えない。

ある程度離れた距離において同じだけの女性の身体情報を得るのに、日本人男性は、印欧系民族や騎馬民族よりは多大な言葉・多弁を必要としなかったであろう。ここでは、前回の記事に書いた「ダイナミックな女体観」と「スタティックな女体観」ということも、深く関係するだろう。例えば、先ほど、日本人は「n」と「m」を区別せず、どちらも「ん」ととらえると書いたが、ならば「n」と「m」とを区別するとはどういうことかと言えば、人体を「ダイナミックに」分けているということである。「n」か「m」かの違いを簡単に知ろうと思えば、その話者の唇が開いているか閉じているかを目で見ればよいのであるし、「n」か「m」かで、口の周辺の筋肉の動きや機能に違いがあるのは一目瞭然である。それをなぜか日本人は、縄文時代から区別していない。区別する気もなかった。ただひたすら「普通の子音+母音とは違う、鼻にかかる官能的な音」ととらえるのみで、口の動きを全然見ていない。「r」と「l」の区別も然り。ただひたすら「舌が口腔上部にはたきつける音」ととらえるのみで、外から視覚的に「r」と「l」の女の口の動きの違いを見ようという気がない。一方で、「あ・い・う・え・お」の違いは、目で見なくても遠方から明確に聞き分けられる。我々日本人男性は、こういう言語を母語として、女性を何千年間も知覚してきたわけである。日本人は、ずいぶん遅くまで「おーい」や「やっほー」にも似た擬音語・擬態語のみで会話を行っていた民族であろう。そのような母音構造は、前回書いた「[ɪp]」が示すような区切り方を一切しなかった日本人の

人体観・女体観と表裏一体である。

「旅をせぬ」も「旅をせん」と言い、「旅をせむとする」も「旅をせんとする」と、「n」も「m」も「ん」に持つていくのが日本人である。もしこれが、日本人にとって区別されるものであったら、「sen」と「sen」の違いは、極めて身体間の距離を小さくして初めて伝達しうるものとなり、逆に話者同士が五十メートルも離れば、「n」と「m」の違いは（ぬ（nu））や（む（mu））と言わない限り）伝わらなくなるだろう。これを伝えようとして、パーソナルスペースを削り取ることになる。それによって身体観の距離がどんどん縮まる。母音の総量ということではむしろ古代日本語に近かった原始ゲルマン語やラテン語が、早いうちから子音化の道を辿って、最後は英語の純粹破裂音や純粹摩擦音に行き着いたのは、パーソナルスペースを削った結果であろう。日本語が今に至るまでそのような変化をしていないことの意味に、我々は、人体観・女体観の共有や、民族レベルでの対女性共感覚の名残りといった観点から、主体的に気付くべきであろう。日本人は「cap」や「cat」のような単語の作り方はしない。これらを欧米言語並みに区別する漢語が入ってきたとき、日本人はどんなに苦労しても「kyappu」や「kyatto」などと、自分たちの身体観に合った母音構造に作り変えた。このように作り変えることで、同性・異性の身体間の距離を保とうとする。同じ情報量を、よりいっそう遠い距離において知覚・認識することに長けていたのは、日本人であると言ってよいであろう。パーソナルスぺ

ースが広い分だけ、言語の音韻体系もそれに合わせて調整が起ころのである。これは根源的には、同じだけの異性の身体情報を知覚するのどの程度遠方の距離にまで耐えうるかということが、その言語の母音構造を調べてみれば分かるということの意味する。

従って、前回と同様、「数センチメートル先の女性の月経周期が衣服の上から感知されることがある」といった僕の対女性共感覚が、共感覚を持つ欧米人男性よりは、まず初めに日本人男性に再び共有されるのではないかという薄っすらとした期待が、今回紹介した「日本語の母音構造が縄文時代以来崩れていない」ということをもう一つの力ギとして、生じてくる。むしろ、一般の日本人男性と僕との間で、人体観・女体観が同じで、しかも同じ言語をしゃべり、母音構造を共有しているにもかかわらず、ひとえに共感覚の有無にのみ落差がある、同じだけ離れた距離において女性の身体に知覚・認識する情報が全く違う様相を呈しているということに、自分は名状しがたい興味がある。しかし、「同じ民族で、人体観や音韻構造を共有しているも、知覚に差が出ることがある」という解釈は、（これが、僕がいつもメールをやり取りしている諸科学者の解釈なのであるが、）おそらくは危険であって、むしろ「知覚に差があるのは、人体観や母音構造の把握の仕方そのもの、脳と体の”知覚システム”に落差が付いた状態にあるからである」と言うべきであろう。ここにおいて再び、欧米人と日本人との間にある知覚の差異の質量と同等のものが、今の一般の日本人男性と、日本的な共感覚を持つ僕との

間にもあるという、前回と同じところに落ち着くのもかもしれない。

しかし、英語その他の外国語に、むしろ自ら興味を持って取り組んできたと言える僕が、数センチメートル離れた日本人女性の月経周期を色彩や音動で感知する共感覚を残している以上は、「日本人男性が外国語（欧米語）を身に付けると、対女性共感覚を失う」という言い方は、当然できない。むしろ、僕がこれまでに書いたようなことを主体的に意識し、常に考えつつ生活し、言語と向き合う、ということを経験し、ここまでは来た日本人男性の姿勢そのものに、原因を求めなければならぬと自分は考える。今では「ありがとうございませす」や「おっす」の「す」のように、「ns」ではなく「s」と閉音節で発音するものがあるが、これも欧米語の影響であって、それを「日本語も閉音節がある」としたり、かつての遊女の「ありんす」言葉と類似しているなどと論じたりすることは、日本人男性の共感覚を懐古するにあたり、適切ではないであろう。

今年の目標&対女性共感覚

二〇〇九年二月十日 起筆、擱筆、公開

すみません。忙しくて、更新頻度が落ちていきます……。

●今年目標！？

僕のような共感覚者本人が共感覚に関する論文を書くということ、脳科学者や心理学者の目からすると、ものすごく難しい問題を含んでいる。いわゆる自然科学と呼ばれる範疇にある学問の基本とは、「常に客観論であること」である。「これこそが共感覚者に普遍的な定理である」ということを言うためには、自分に当てはまることと他者にも当てはまることを証明しなければならない。

ところが、僕の場合は自分が共感覚者なのだから、「かくかくしかじかの理論が成り立つ。その根拠として、自分もそのような体験がある。」などという論調を避けることができない。この二文目があるかないかで、科学の世界では感想文か論文かの評価が決まってしまう。どうやら、この点が、いわゆる科学者の範疇にいる人々から僕が常に受けている「フィルター」ないし「迂回された視線」であると感じる。共感覚に限らず、Aということを経験して語ろうとするとき、Aの体験者であるということは、それだけで既にハンディである。

当然僕としては、それを避けるために、僕と同じような共感覚を持った男性を、同じ人間としてと言うよりは、ただのデータ集めとして探し回ることになる（実際には、人間としてしか探せないのだけれど・・・）。ただし、そうして得られた、自分の論文に登場するデータは、他人の共感覚体験であって、自分のそれではない。むしろ、自分の実体験をなるべく排除して無感情と客観に徹することが、「共感覚論」としての信憑性を高める。結局、共感覚者本人が共感

覚論文を書くということ自体が、今の科学論文の常識から言うと、そのまま文学作品としてしか存在し得ないことになる。世の共感覚研究者たちは、たった四・五人の共感覚者のデータを取っただけで、普遍的定理を導いたかのような言い回しを使っていることがあるが、なぜそれが許されるかと言えば、結局「他人のことを研究している」からだ。

一方で、百人のデータを取ってきたとしても、そこに「共感覚者である自分」というニュアンスが入っただけで、それは評価としては感想文にしかない。換言すると、科学の世界では、「自分を語るのには常に他人であり、自分は他人のことしか語り得ない」。この点に抵触すると、たとえ僕が取った正確なデータであっても、はじめられることになる。しかし、科学論文にしても、結局は科学者の言うところの「感想文」であるはずなのだ。本当は、「感想文でない論文」などあり得ない。自分たちの言説が全て正しいのだという共感覚研究者の科学への信頼の仕方は、多分に非科学的だと思えることがある。

この葛藤をどうやって超克していくか、それを今年の目標とした。自分の共感覚体験をも遠慮なく語り、かつ揺るぎない客観論としての共感覚論を表明できるような文章の書き方はないものかどうか、それを考えたい。

●先回の研究の一例

一般的な社会生活を自力で送ることができないほどの重度の障害

を持つ共感覚者の男性の中に、僕どころではない強烈な対女性共感覚を持つている男性がいることが分かった。これは、僕が最近見出した「ある尋ね方」で分かったのだが、そういう男性は、十メートル離れた所から衣類を着た状態の女性の排卵が把握できるとのことだ。もちろん、いわゆる言語障害があるのだから、普通に尋ねても無理で、ある特殊な、僕が見出した方法を用いてそれが分かった。

僕の場合は、十メートル先からだ、月経が分かるくらいで、排卵感知能力は思春期にほとんど消滅した。今では、ある特定の天候や状況など、条件がそろって初めて排卵が察知できる。そもそも排卵というのは、月経と違って、全ての過程が女性の体内で展開されることだから、到底、通常の五感で察知できるものではなく、こういう障害者男性の感性というのは、障害どころか、共感覚の中でも最も原始的な、優秀なオスの能力ではなからうかと思う。

前回の質問についても多くの回答が集まったが、一つ例を示しておくと、排卵感知能力を持った障害者男性は、「私は昨日、髪を切った」と「私は昨日、爪を切った」という、文法構造が同じ日本語を聞いたとき、主体と対象との区別が付いていないことが、僕の研究により分かった。普通の日本人は、前者の「髪を切った」のは理容師・美容師、後者の「爪を切った」のは自分自身だと判断するが、排卵感知能力を持った男性や、重度の共感覚者女性の場合、「私」の語を「個人」だとか「個性」という概念（自分と他者の区別）に「収束」することができない。すなわち、髪を短くしたいと「意志した」

のは自分であるということまでは分かって、誰が誰の髪を切ったのか分からないのである。

驚くべきことに、こういう男性は、女性の排卵を感知したのが「確固たる自我」を持った「自分」であるという意識がなく、むしろ自分のその能力を「自然現象の一部」として認識している。このことは、僕にも当てはまることであり、女性の月経を感知できる能力が、自分のことと言うよりは、オス全体にとって共有されているべき当たり前の自然現象であると感ぜられている。

本来なら、あるいは文章語なら、「私は昨日、髪を切られた。」か「私は昨日、髪を切ってもらった。」と言うところを、一般日本人は「私ね、昨日、髪を切ったんだ。」などと能動態で言っ通じる。「髪は理髪店で切ってもらったもの」、「爪は自分で切るもの」という、確固たる「自我」と「他我」との対立に基づく文明生活の中であって、こういう文法を残す先進国の言語は、日本語を置いて他にはない。

言い換えれば、能動態と受動態という文法概念がない言語社会においては、先のような障害者男性は自力で生活が可能であったわけである。人類の言語の変遷過程で能動と受動の区別が生じたのは、「近現代社会・西洋文明社会に要求される自我」の芽生えの時期と一致している。日本語で「れる」「られる」が「受動態」と認識されるようになったのは明治時代であるが（それまでは「自発」という文法概念で示される。もともと、学校文法では今でも、自発・可能・受身・尊敬という不自然な分け方をしている）、西洋では古代ギリシア語やラテン語の時代からすでに分裂が見られる。二千年もずれて

いる。

先の共感覚者男性や女性は、文法も世界認識も古代日本に従っていると言えるが、一般日本人では、文法だけが古代日本語に沿っていて、世界認識・脳の働き方だけが近現代的・西洋的であると言える。

そういう僕はと言うと、現代日本語は本来の日本語としてのあり方を失っているとの何とも言えない違和感を感じつつも、一応はこうして言語生活を送ることができている。排卵・月経感知能力を持つ男性が、どうして西洋ではいっこうに見つからないのか、その理由が分かってきたとも言える。「文化依存症候群」という言葉があった、例えば「対人恐怖症」という「心の状態」は、現代では日本民族の脳と体でしか起こらないことが分かっているが、それと同じで、今では日本民族や少数民族の男性にしか存在しない「共感覚」もあるはずである。

西洋ではかろうじて、古代ギリシア語に「中動態」という、「私は髪を切った」に近い言い方の残影がある。日本の子どもが早い時期から英語その他の現代欧州語（フランス語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語・オランダ語など）を学ぶような時代が来ると、日本人男性が古来より持ってきた女性の身体に対する感知能力が猛スピードで失われるのではないかと予想は以前からあったものの、数十の文法構造からもそれが示されてしまうことを昨年見出したのは、ある意味で嬉しくもあり、恐ろしくも感じられることだった。

それにしても、今や一年中発情期の男性ばかりなのだから、女性

もそれに合わせて、ニワトリのように一日に一度の排卵がある、などという体に進化（いや、変化）してもおかしくなかったのに、なぜほとんど全ての女性の体が今でも、対女性共感覚を保持しているごく少数の男性だけに応答し、そういう男性を無意識に選択するような仕組みを持ち続けているのか、これをうまく説明できている科学者はいない。僕も含めてそうなのだが・・・もともと、一年中発情期になっても、一か月に一度の（いわば自分の子孫を残すチャンス逃さない）能力を失わない男性がいる以上は、「失うこと」を「体の勝手な進化、文明社会の発展」だけのせいにすることはできないことになる。つまり、「この能力を男性として失うまい」という何らかの意志が、実際にこの能力の保持に影響していることを意味する。そうになると、「健常者の男性に無くて、僕や重度の障害者男性だけに有る意志とは何か」ということが問題となってくる。ところが、その「ある意志」を説明するためには、結局「共感覚」の概念を使わねばならないことにも昨年気付き、結果としてその「ある意志」はそういった共感覚を持つ男性にしか体験され得ない。しかし、何らかの伝達方法はあるはずであり、今後とも追究していきたい。それにしても、女性はどうして数十万年間も、基本的な体の仕組みに変化がないのかと思う。発情期の残影（性的欲求に今でも波がある）まで多くの女性が自覚している。僕も、自分の能力を完全に失わない若いうちに、しっかりと勉強・研究していきたい。

見方を変えると、今の女性の身体の仕組み自体が、かつて我々男

性がおしなべてどういう共感覚能力を持っていたかについての、最大の証人となつていとも言えそうだ。もつとも、試験管の中で人間が誕生するようなことが一般に行われる時代がもし来たら（もう来ているか・・・）、女性の排卵が月に一度ということ自体に意味が見出されなくなる恐れがあるし、僕や重度の共感覚者男性の能力も、完全に不必要な能力となる時代が来るのだろうかと思うと、実に寂しい気がする。女性の排卵が月に一度ということには、意味があるのである。どれほど科学技術が発展しようが、人間の基本は変わらないのである。それだけは、科学者の男性には決して忘れてほしくない。どうしてそこから順に歪めてとらえ、むしろ科学のほうに都合よく合わせて人間のあり方や森羅万象を説明しようとする傾向がしばしば見られるのか、これについて、僕にはどうしても、賛同する心は起こらない。

「花」&少し説明（対漢字共感覚の男女比）

二〇〇九年七月二十二日 起筆、攔筆、公開

引き続き、色々な「花」が集まっています。

<http://www.ji-art-music.com/hana/>

皆さん、実にすばらしいですね。本当に美しい。これだけの共感覚者が日々頑張つて生きていると思うと、心強いです。どこかで止めないといけないのですが、別に止めなくても、50個たまるごとに1曲作る、という形式でもいいわけですからね。もう少し、皆さんの「花」を楽しませて下さい。

共感覚者の間でもあまり色遣いに差が出ない文字かと思いきや、本当に様々な色遣いで、見とれてしまいます。

それと同時に、皆さんの「花」に付いてきたコメントを拝見して、普段の生活では本当に、共感覚を発散できる、こうした「遊び」をする機会が無いのだなど、改めて感じさせられます。このことだけは、本当に寂しいです。僕は、こういう共感覚の試みは「高尚な遊び」だと思っています。だから、こうして「花」一つにも美しい色を塗れるあなたは、心の美しい、「遊び方」を知っている人間なのです。ぜひご自分の感性に自信を持って下さい。

今のところ、僕以外は全員女性ですが、うち3分の2以上が、僕と同じで「全ての漢字に色が付いて見える共感覚」を持っていらつしやいますね。こと漢字では、同じ厳格さを持つて調べると、男女比は1:30か50か、それ以上になります。共感覚者全体の男女比は、1:6~8とするのが一般的ですが、これは言語障害のない健常者だけを比べたのを研究者が主張しているもので、実際は、男性に多

いアスペルガー症候群・自閉症者の中から共感覚者を探して計算に入れると、一気に跳ね上がって1・2・3くらいになりますから、本当は共感覚に男女差なんて無いのです。

つまり、皆さんは、僕ら男性では簡単に「知的障害者」とレッテルを貼られてしまう知覚領域を、普通の生活で体験していらつしやる方々なんです。女性はX染色体が一つ傷付いても、もう一つ予備のXがあるから、障害が出にくい、などという説もありますけれどね。それだけでは片付かないと僕は思いますけれども。

ですから、僕のように何でもかんでも色が付いて見える男性で、知能に全然問題がない人は、ほとんど奇跡的でしょうね。逆に言うと、今障害者と呼ばれている男性は、どんな漢字でも全て共感覚で見ている可能性がある。言い方が難しいですが、僕が持っている対女性共感覚も、難なく持っている人が多い可能性がありますね。でも、それを確認するのは「言葉」ですから、確認のしようがない。それを僕の場合は、「言葉」で告白できる点で、稀有な位置にいる男性だというわけです。

それに、「知能」と言っても、ここでは「現代先進国社会の男性の世界認識」という程度の意味ですね。他の動物のオスから見れば、人類のオスは全員が「障害者」とも言えます。動物のオスの常識的な特徴を欠いています。「物や人の形状に、共感覚で色彩を見る」能力

は、その典型です。オスにとつての究極の「形」はメス（女性）ですから、男性においては、「女性の排卵感知」と「あらゆる漢字（形状）に色が見える共感覚」とは、元を辿れば、同じことを別の言い方で言ったものにすぎないんですね。後者は前者の名残・残影・先進国バージョンである、と言ってもよい。

つまり、女性を目視して排卵・月経感知ができる男性は、必ず「全ての文字・図形・記号などに色が見える共感覚」を持っているわけです。だから、ある男性の排卵感知能力が本物かウソかは、全ての漢字に色を言わせてみると、即答できるかできないかで簡単に分かるわけです。笑い話のようで、真面目な話。だいたいは、ここで多くの男性が引かかるところが、これを突破する男性がいて、それこそが自閉症の男性です。

それにしても、それらが同じ起源を持つ知覚現象であることが体で分かるのは、まさにその体験者である僕であり、今の一般男性には分からないことだから、余計に説明しづらいわけですが・・・。

「何かを得る」ということは、「何かを同じ質量だけ失う」ということです。人間の世界認識もそうですね。「進化」は、同時に「退化」でもあります。人間は「文字」や「論理力」を身に付けた代わりに、「形状を、何の変更・抽象化も加えずに、ありのままに感知する」力を失いました。このことは、オスにおいて決定的な形で現れたわ

けです。人類のオスが今の知覚能力のまま生きられるのは、ほんの数千年（数百年？）だという気がする。「景気の危機」だとか「政治の危機」だとか言うけれども、じゃあ「オスの危機」なり「日本人男性の危機」なりは誰が議論するんだという気がする。それが、僕の共感覚研究の根底にあります。

でも、女性は今でも多くの人が、その共感覚を失っていない。だから、僕は共感覚者女性を羨ましいと思うことがあります。人類のオスが失った重要なものを、皆さんの「花」に見る気がします。それが僕の中で、何とも言葉に表しようのない空しさになっているのを感じる。このたびの「花」の試みも、そんなことを思いながらやっています。

共感覚と読字障害は表裏一体である

二〇〇九年十月七日 起筆、攔筆、公開

高校生 X Y Z

画像を使って、ちょっと面白い共感覚の説明をします。

■ 1、一般健常者

“三”と書こうとして手が滑って歪んだのだな。「これは二年生だ。（中央の線への意識を捨象）」、「印刷ミスで“N”の一部が欠けただけで、これは“N”に違いない。」などと即座に判断する。「三」の中央の線のズレが大きい場合は「二」と読むだろうし、ズレが小さい場合は「三」と修正して読むだろう。）

■ 2、共感覚者

多くの共感覚者は、一般健常者と同様に判断し、言語障害・読字

障害はほとんど無い。

■3、一部の重度の共感者・自閉症者・読字障害者

「三」でも「N」でもない新たな文字（風景）として認識する。（形が同じものは同じ意味・記号性を持つと認識するので、上下の三文字目は同じものだと認識する。）

あるいは、文字を読むのに時間と労力を要するが、何とか判別できる。

ちなみに、私自身は、時々3に陥りますが、基本的には2です。（1→2→3は、本当はもっと連続的です。）

我々は、1の状態のことを「健常者」と呼んでいるわけです。多くの共感者では、ひらがなとカタカナとで文字の共感色が一致しますが、これは明らかに「文字の読み方の知識」の影響を受けていますから、ほとんど「1に近い2」と言えるでしょう。事実、形の違うひらがなとカタカナとで共感色が違う共感者は、男性の場合には言語的な知力・学力はほとんど無いと言ってよいです。女性の場合、かろうじて自力で言葉によって訴える人がいます。

私のように、3から今も脱し得ないのに言葉が使えたり本まで書けたりする男性は、ほとんどいないと思います。私と同じ強度の共感者男性を見ますと、ほぼ全員が、一人で買物も電話もできません

ん。

現代の社会生活では、ほぼ「言語能力≡知力・知性」と言ってよいので、3は致命的な障害だと思われるわけですが、見方を変えれば、「ちよつとした形（色・音など）の違いに敏感である」「ちよつとした違いを無視できない」わけですから、人の体調の変化などはすぐに分かるわけです。私が3に陥って、上の画像の「三」と「N」との違いを判断するのに時間がかかるときほど、本で書いたような対女性共感が異常に鋭くなって疲労するのは、そのためです。

一方で、1のように「三」と「N」がすぐに区別できる時期や日には、女性の排卵・生理の感知はほとんどできませんし、文字の共感色も少し薄くなりますし、音階に見る色も薄くなります。「ちよつとした違いを無視できる抽象能力を持っていること」と「健常者であること」とは、現代では同義です。

私は3に陥っているときほど、和歌が「頭の中に降って来る」感覚があります。ですから、私にとって和歌とは、いわゆる言語(Language)ではありません。自分の知覚や精神性の「焼き写し」「刻印」です。いわゆる健常者が「文字」を読んでいるとするなら、重度の共感者は「人体」や「風景」を読んでいるという言い方もできます。

私はよく、「自分は昔に生きていたら、男覲（おかんなぎ、男の巫女

のこと）”だっただろう」と思います。女性も同じで、今の時代は、巫女が必ずしも共感覚者であるとは限りませんが、共感覚者女性はすでに巫女的であると感じます。

私は、「社会的男性性」と「動物的・男靦的オス性」の両方を主体的に意識していて、自分の言葉で語れる点で、珍しがられるのだと思います。

第二部 僕の共感覚を理解していただく上で

二〇一〇年十月四日 起筆、攔筆、公開

二〇一三年十月十七日 更新

以下は、僕の共感覚を理解していただく助けになる良い文章だと思っています。数年来交流のある、松本孝幸先生の文章です。僕の親世代の男性です。

僕は、特殊な感覚を持った人間として、色々な研究者・専門家から関心を持たれています。けれども、嬉しくない場合は一つもないと言っても、最も嬉しい形での関心の持たれ方というのは、僕にもあります。

心をこめて人に接し、平易な日本語で丁寧を書く作業が、いかに知的で深遠なことを、以下の文章は教えてくれるように思います。

● 『音に色が見える世界』 岩崎純一

<http://matumoto.t.blue.coocan.jp/09yohhon10.html>

● エロス核と対女性共感覚

<http://matumoto.t.blue.coocan.jp/kokoro9.html>

● 嗅覚と共感覚

<http://matumoto.t.blue.coocan.jp/watoson100.html>

● 心的現象論と共感覚

<http://matumoto.t.blue.coocan.jp/ryoukaiz9.html>

● アフリカのとうもろこし (10)

<http://matumoto.t.blue.coocan.jp/indian107.html>

● 「視覚で考える」という記述 (1) (2) (3)

<http://matumoto.t.blue.coocan.jp/utigawajihai337.html>

● 「共感覚で考える」ということ

<http://matumoto.t.blue.coocan.jp/utigawajihai338.html>

● 共感覚と自閉症

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/utigawajjhei339.html>

二〇一三年十月十七日 追記

この松本孝幸先生の文章へのリンクは、以下のページにまとめました。(二〇一八年七月八日に追記：現在、これらのリンクはアーカイブに収録。)

<http://iwasakijunichi.net/joho/index2.html>

第三部 対女性共感覚

二〇一一年六月十九日 起筆、攔筆、公開

「対女性共感覚」とは、私の造語であり、我々ホモ・サピエンスの男性が女性に対して有しうる共感覚の総称である。これには、「女性の排卵期が色で見える」、「女性の月経期が音で聞こえる」、「妊娠中の女性のそばにいと、一緒につわりを覚える」などが含まれる。

現在、私自身を含め、私が自分のウェブサイトを通じて知り合った成人男性数名がこれを有し、また男児においては保持の確率が極端に高く、母親からの報告が私のもとに寄せられている。成人男性の場合、主に発達障害を伴う男性がこの感覚を喪失せずに保っている

るのが興味深い。

この共感覚と大脳皮質的な高次知能とが反比例の関係にあると思われる点では、この共感覚の中枢は大脳辺縁系、基底核、脳幹、中脳、小脳などにあると思われる一方、調査次第では、この共感覚を多くの男性が維持したままいわゆる高次知能を獲得している部族が、アフリカ・東南アジアなどに存在する可能性があると思う。

なお、「親女性共感覚・溶女性共感覚」と名付けなかった理由は、著書『私には女性の排卵が見える』に詳細を書いている。

第四部 私の仮説「共感覚原帰属性仮説」

二〇一一年六月十八日 起筆、攔筆、公開

私が今のところ考えるに至っている「共感覚原帰属性仮説」は、以下の通りである。(半ば自分のメモとして書いたものでもある。)

「共感覚は、人間の幼児には必ず存在し、人間個体の発生と成長に伴って減衰する。減衰は、厳密には西洋的自我を発見した後の人間個体にのみ生じている。五感をつかさどる脳領域の観測上の分裂及び五感の知覚上の分裂は、その人間個体の母語が有する格機能の性格優勢性が認識させる。また、このことは、印欧語族とプラトニズムの折衷されたラテン語族において最初に自覚された。個体発生における系統発生の反復が、出生後の個体成長とその種の成体の経年

変化に延長できるならば、同一人間個体の成長過程における共感覚の減衰は、西洋的自我発見以降の人類種における共感覚の減衰を回復する。このため、現行の自閉症・発達障害・アスペルガー症候群者は、すでに系統的に共感覚的知覚の保持者である。この共感覚の「持ちやすさ」は、鬱病や解離性障害などの一見後天的と思われる心的外傷の「受けやすさ」と同義であって、従って、およそ重度の鬱とは、脳機能それ自体として共感覚の発生機序に同一である。ここで、共感覚の産出源を脳に限らなければ、共感覚は、人間の原帰属性であるばかりか、全ての生物と自然物の原帰属性であり、また唯識論における阿頼耶識の原帰属性であって、近代西洋的デカルト的自我（自己意識）の変容を伴う精神症状である解離と分裂は、自然言語の格機能の系統遡及である。最古の共感覚における最初の他者は異性であり、最新の共感覚は五感の弁証法（アウフヘーベン）的統合である。現行の「共感覚」とは、後者を指している。このような葛藤を常識（コモン・センス）とする大衆社会は、全ての生物と自然物すなわち生物全体社会のうち、デカルト以降のキリスト教圏白人社会のみであり、日本においては厳密には戦後のみである」

第五部 乳幼児総共感覚者説

二〇一一年六月十九日 起筆、摺筆、公開

「乳幼児総共感覚者説」とは、私の造語であり、「乳幼児は例外なく皆共感覚を有している」とする説である。

特に珍しい考え方ではなく、これと同様の学説は、すでに生理学方面での共感覚研究の一派において主張されている。

この学説の立証は、主に乳幼児の脳活動計測によって行われている。今後は遺伝子研究なども行われていくと考えられるが、私としては、「調べなければ分からない」性質のものではないと考えているので、研究の激化については少なからず疑念や不安を抱いている。

私の視点・関心は、「乳幼児は例外なく皆共感覚を有している」という、最後には行き着くに決まっていたかもしれないこの結論が、なぜ多くの現代人（の成人）には先験的認識として分らなかったのか。乳幼児期の記憶は、いったいどこに消えたのか」ということだと思ふ。

これと反対に、「共感覚は、主に成人のものであって、成長過程で学んでいく高度知能の一種である」という意見や、「共感覚は、動物は持つておらず、人間だけが持つているものである」という意見も、私の周りで聞かれる。しかし私としては、やはり共感覚は、現代の成人よりも子供、古代人、動物のほうが強く持つている（いた）と思ふ。

第六部 日本的共感覚人間学（仮称）とは

二〇一一年六月十九日 起筆、摺筆、公開

私は元より「学者」という肩書は持たず、自分の持つ共感覚、自分の共感覚論・人間論について、講師として学会での講演や大学での授業をおこなったり、専門家と対談したり、著書を出したりしていただけである。

しかし、それなりに自分の共感覚論が世に出たり、言語に障害の出ている精神疾患者による使用を目指す「岩崎式日本語」を考案していくにつれて、私の共感覚観や人間観というものが持つ特徴や、現行の生理学全般における共感覚研究者の学説との共通点と相違点・齟齬というものも、明確になってきた。

そのうち、共感覚仲間などから「あなたの共感覚論・人間論は、どう見ても一つの新学問体系を成しているので、固有名詞を冠してみてもどうか」と（本気半分、冗談半分だと思いが）言われ、自分の思考体系の呼称を本当に考えてみるのも面白いだろうと思うようになった。それで、ひとまず「日本的共感覚人間学」とすることにした。

「日本的共感覚人間学」とは、私が思い描いている「共感覚原帰属性仮説」というものを元に、共感覚を中心とする日本的な人間学を構築する一連の学術的思考体系の呼称で、分野は哲学・文学・日本語学・言語学・和歌論・心理学・文化人類学・神道・仏教学・音楽学・数理論理学・素粒子物理学・認知科学・神経科学などを扱う。

と言っても、私の主催と学説のもとに集まることが主旨ではなく、

現在のところ一個人として直観的洞察でとらえているにすぎない同仮説が普遍的正当性を持つか否かを、この仮説が扱っている共感覚と周辺の精神症状を呈する当事者たちの協力のもと、精緻に思案することを目指そうと思う。それから、協力者の力を得て、日本の重篤解離性障害者を使用の対象とする「岩崎式日本語」を含む一つの言語学・心理学・精神病理学・人間学の体系を完成させることを目指そうと思う。

また、世界的に皆無であると言ってよい「日本人以外の東洋人」の共感覚と文化結合症候群的精神症状の探究もおこない、「我々が日本人であるとはどういうことか」についても探究したいと思う。

私は、色々な専門家から私の共感覚や脳機能の調査のため遺伝子や血液の提供を求められていて、共感覚当事者としての著書を出した立場上、いずれは協力することになる時が来ると覚悟している。私の知人の共感覚者やこの研究会メンバーにも、私と同じく、人体組織の採取による共感覚の解明に少なからず本能的抵抗を覚える人は多いようであるから、少し安心している。

第三編 三十歳〜三十九歳

第一部 直観像記憶と共感覚

二〇一三年七月三日 起筆

二〇一三年七月二十日～二十三日 集中執筆

二〇一三年七月二十五日 公開

二〇一七年三月十三日 最終更新

特設サイト「知覚・共感覚」

●直観像記憶と共感覚

喪失した共感覚を書いてから、七年が経ちました。相変わらず「共感覚を用いた能力のうち、数学に関する能力が、時が経つごとに優的に衰えている」という私の共感覚の特徴は変わっていないようです。基本的な共感覚や、著書で挙げた個々の数字の色だけは今でも明確に知覚されているのが不思議なくらいです。

上記ページを書いたのち、私の元には「あまりによく分からない感覚なので、もっと分かりやすく教えて下さい」というご質問やご相談を頂きました。唐突ですが（しかも、分かりやすくなっていないか）たら申し訳ないですが、二つほど新たな共感覚の事例を紹介しておきます。

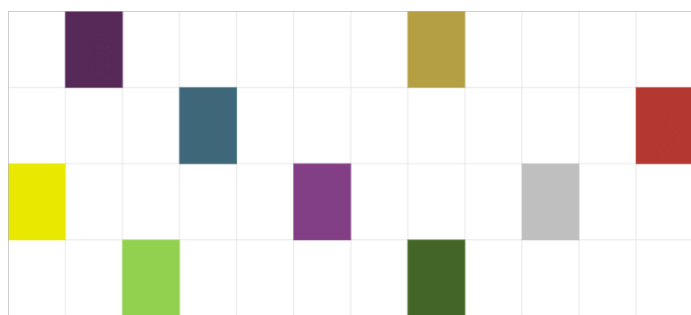
●チンパンジーと私の直観像記憶

一つ目です。突然ですが、以下に三つの映像をリンクしましたので、ご覧ください。「直観像記憶（映像記憶・Eidetic memory）」に興味のある方にとっては、面白いと思います。

私は今でも、以下の実験のようなケースでは、チンパンジーやサルに近い直観像記憶を示せる状態にはあると言えます。画面に映った1から9までの数字に瞬間的に色が付いて見えるので、その色の順番に押せばよいわけです。正答率が、体調・天候・部屋の環境によって違ってきますが。

そのため、「数学の解法がより一般的に」なり、喪失した共感覚にあるような「正答に直観的共感覚能力で達する解き方」をしなくなったというだけで、「数字に見ているものは何ら変わっていない」のかもしれない。

◆私自身の共感覚による直観像記憶の動画



↑ YouTube で見る

<https://www.youtube.com/watch?v=oAP7CXW0N80>

◆ チンパンジー・アイとそのなかまたち（京都大学霊長類研究所）
動画集のところに色々な動画が掲載されています。

<https://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/aifa/publication/SanaInoue/Inoue2007.html>

京大の論文 “Working memory of numerals in chimpanzees.”

この手の実験結果の分析によく見られるのが、「チンパンジーも、数か月、数年をかけて訓練すれば数概念を理解できるようになる」とが判明した」というもので、上の映像の実験もそのこと、つまりは「チンパンジーの知能」にまつわる知見の確立を狙っていますが、私はこれには少し疑問を持ってきました。

チンパンジーは究極の「直観像記憶家」であって、数概念を理解せずに「数字の形状」の「写真」を頭で撮り、画面を押しているだけではないかというのが、私の感じ方です。

私も、このような実験の回答において、瞬間的に抽象的・記号的な数概念を記憶してから色に対応させているわけではないです。そうではなく、瞬間的に「目と頭で写真を撮る」のです。個々の数字は見えていないです。結論から言えば、「数」が分かっているかとも、順序を答えることができます。いわば、「チンパンジーの知っている世界や気持ちが分かる」といったところでしょうか。

ただし、同じ「数」を表す記号であれば、アラビア数字であっても漢数字であってもサイコロの目であっても、私には同じ色に見えます。「6」も「六」も「・・・」も青紫色です。明らかに「数の大きさ・小ささ」を思惟している証拠です。この点ばかりは、私がおもや原初的な「ヒト」というよりは、現代の「人間」である証拠だと思えます。

「ならば一体、形状の“写真撮影”と数概念の理解のどちらが先な

のか」といつも言われるのですが、ここが相当に説明が難しいところなのです。ほとんど同時と言うしかありません。映像で示した以上に早く色が付きます。

「感覚・知覚（低次能力）」と「思考・理解（高次能力）」との落差を付けることを「停止」して得られる、こういったチンパンジーや私の直観像記憶は、私なら少々自分の東洋哲学趣味を入れて説明することになるのですが、西洋哲学ですと、例えばベルクソンの言う「純粹知覚」を思い出していただくのがよいでしょう。オーソドックスな日本人哲学者がよければ、西田幾多郎を読んで「純粹経験」や「行為的直観」を学ぶのもよいと思います。

数字だけではなく、普通の文章を読むときも、私は漢字や仮名に見える色を追って読んでいますし、二冊目の拙著で「対女性共感覚」と名付けて告白した共感覚も、「直観像として女性の写真を撮っている」感覚です。小学生の頃、一九九〇年代の国産車であればヘッドライトの形状だけで車名を当てることができていたのも、この直観像記憶によります。

ということ、もしチンパンジーが数概念を理解せずに共感覚を用いているとしたら、「6」も「六」もサイコロの目の「●●●●●●」も瞬時に異なる色彩に見えているはずですから、人間の私よりもっと多様で難しい並びの数字・文字・記号の羅列を記憶できることになると思います。

結局のところ、上記の長い訓練において、「チンパンジーはほとんど何もやっていない（生得的な知覚能力だけで余裕で数字の順番を

答えている）」というのが、私の見解です。チンパンジーが「何もできない存在」というわけではなく、「人間が訓練を施したところで、直観像記憶能力がびくともしていない存在」という意味です。

ただ「数字の形状」と「順番」との対応を、チンパンジーなりの直観像記憶・共感覚的能力・純粹知覚において再現しているだけだと私は感じます。

●天才と共感覚

ところで、『週刊現代』二〇一三年四月二十日号の「賢者の知恵」に、天才と数学と共感覚の関係にまつわる興味深い記事が載りました。

（←ネット上でも一部を無料で読めます。）

「天才」と呼ばれた人が、本物の「天才」に出会ったとき【第一部：理系篇】名門高校の神童？ 東大理Ⅲ？ それがどうした！ 大学に入って分かった「オレは大したことない」（『週刊現代』二〇一三年四月二十日号）

記事の内容としては、「自他共に認める天才で、東大入試が朝の歯磨きと同レベルにしか感じられず、余裕で東大に合格した人が、自分以上のひらめきや共感覚を持っている日本や世界の天才たちに出会い、徐々に自分の傲慢さを認め、自分の道を模索していった」と

いう、よくありそうなパターンであり、かつ「バカと天才は紙一重」という、これまたよくあるフレーズも用いてある記事です。

要するに、記事の体裁そのものは、週刊誌らしい商業的諧謔を免れ得ない非学問的な体裁ですし、個人的に首肯しかねる箇所もありますが、しかし、挙げられている方々は素晴らしい感覚能力の持ち主であって、内容は非常に面白いと私は感じました。

共感覚者は、なぜかいつも決まりきったように「天才性」と結びつけて語られます。ある意味では、これも非常に「テレビ的・喧伝的」な発想だとは思いますが。

ただし、私も必ずしもそのような発想を良くないと思っているわけではなく、実際のところ多くの人が、共感覚者が訴える感覚世界に強く憧れているのは事実ですし、あるいは、人間そのものが常に「共感覚的・天才的な何か」を持つ子どもとして生まれる存在だからこそ、そう思うのではないのでしょうか。

今回の雑誌記事を読んで、私は極めて安心しました。この記事に登場する方々を、恐れ多くも「仲間」だと思いました。「仲間」というのが、決して「同じ東大に行った仲間」という意味ではありません。「ある問題・学問の答えや物事の結末が共感覚や直観力で見える仲間」、「周囲の東大生からも浮いていて、精神的に苦しい青春期を全国のどこかで別々に過ごした仲間」という意味です。

こういう方々は、むしろ学習障害児などの発達障害者の見ている世界や苦悩が分かるのではないかと思えます。なぜなら、私自身が、そのような子どもたちを見ていて、そうだと感じる（自分が彼らの

見ている世界や苦悩を分かっていると感じる）からです。

私は東大文科三類に入りましたが、これは数学と日本史・世界史で合格したようなものとも言えます。英語・国語は、東大を受ける文系の人なら皆成績が良いのです。文系の数学は四問出題されますが、英語・国語の成績が抜群であれば、数学は一問でも正解すれば、合格できます。私は、単に数学で三問解き、四問目も途中まで書いたので、合格できたと思います。

しかし、私が東大数学を解くのに「頭の中で」用いていた解法は、結局は喪失した共感覚のようなものでした。先に数字の空間配置や共感覚的色彩感によって見えた答えに合わせるように、途中の微分・積分やベクトルを「設置」していくだけであって、「答えが見えない」ということのほうが私にはよく分からなかったです。

日本史・世界史についても、まずは年表を眺め、頭で年表の写真を撮っていました。これも先述の直観像記憶です。こう書くと、まるで苦労していない人間のように思えますが、ここで言いたいのは、そういうことでは全くありません。

そうではなく、「生きる上で別の苦労があるのだ」と言うだけで、共感覚による直観像記憶の保持者の方々には分かっていただけだと思います。社会人になって、重要な会議に出ているときに、壁にかかっている絵画までが目に映り頭に入ってきて、集中できないときのことを考えてみていただけるとありがたいです。

（とは言っても、私の場合、ずる賢くなってきたのか、最近では自分の共感覚を抑え込んで職場の同僚に見せない能力に非常に長けてき

たので、あまり問題がないのですが。」

ところが、このような共感覚による数学能力ばかりを優先的に失っていったというところが、私の共感覚の特徴だと思うわけです。歴史の暗記に関しては、まだほぼ昔のままのところがあります。しかし、数学能力に関しては、先の雑誌記事に挙げられた方々のすばらしい能力に及ぶべくもありません。私から見ると、挙げられた全員が天才に思えます。

私の共感覚による直観的な数学能力のなごりは、現在ほもつとメタ数学化・超数学化して、岩崎式日本語の考案時の数理論理的直観や言語哲学的直観に現れていると思います。これらに関しては、「直観的な数学能力のなごり」というよりは「直観そのもの」と言えるかもしれません。

ただし、昔よりも洗練されてきた代わりに、雑多な面白みに欠け始めました。つまりは、昔よりは「計算高い」共感覚の使い方をしているような気がします。しかし、計算高く精神を張りつめていなければ、重要文書の法的処理や会議など、普段の仕事ができなくなるので、致し方ない面があります。

「数字や数学などという抽象概念が分かっているにもかかわらず、数字（というより形状）の順序は、複数のエサの場所を巡る順序と同じように、チンパンジーには分かるのだ。人間の発達障害者の見ている世界も、それに近いところがあるのだ」と、私は思います。

結論としては、先の映像に登場したチンパンジーも、先の雑誌記事に載っている「天才に出会って打ちのめされた過去の天才」の方

も、「その天才の上を行く天才」の方も、繰り上がりの足し算ができないにもかかわらずパズルやルービック・キューブがすぐに解ける発達障害者も、私から見れば、「同じ直観能力、同じ純粹知覚」タイプの、敬意を払うべき天才だと思えるのです。

私はこれらの方々ほどの能力はありませんが、同じ「直観屋」の一員としては、これらの方々述べていらつしやること、何より気持ちに本当によく分かります。

第二部 「直観像記憶と共感覚」のページ

二〇一三年七月二十五日 起筆、攔筆、公開

以下の「直観像記憶と共感覚」のページを設けました。

私の共感覚の映像を載せ、チンパンジーの実験の映像にリンクしました。

(二〇一八年七月八日に追記…現在はこの直前の位置に収録。)

<http://wasakijunichi.net/synaesthesia/eidetic.html>

第三部 直観像記憶と言語知能のトレードオフ仮説

二〇一八年十一月二十六日 起筆、擱筆、公開

以前書いた「直観像記憶と共感覚」に関連して、京都大学霊長類研究所のサイトに掲載されている有用な解説を紹介しておきたい。

「直観像記憶と言語のトレードオフ仮説」

<https://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/aija/k/074.html>

岩波書店「科学」二〇〇八年二月号 Vol.78 No.2 連載ちびっこチンパンジー第七十四回 松沢哲郎『直観像記憶と言語のトレードオフ仮説』より

このページでは、チンパンジーのような直観像記憶をヒトが持たない理由について、「トレードオフ仮説」を提唱し、私と似たような論を展開している。「トレードオフ仮説」という語を用いずとも、同様の論はこの分野で多々見られるようになってきた。私自身が長年述べてきたことと、骨格はほぼ同じである。

但し、「言語知能を有しながらも（しかも、ヒトの中でもとりわけ高い知能を有することが、第三者が実施する試験、例えば東京大学の入学試験などによって、第三者に確認されいながらも）、同時に直観像記憶をも忘れず保持しており、それを忘れず保持することがヒトあるいはヒト個体にとって有用であると理解できるヒト個体が、なぜ現在も存在するのか」といった私が取り上げているテーマには、京都大学霊長類研究所や松沢哲郎氏のみならず、日本の動物研究全

般が、まだまだ踏み込んでおらず、私としてはやや不満が残る。

松沢氏の「トレードオフ仮説」論も、ヒトとチンパンジーの共通祖先は直観像記憶をもっていたと考えている点は、私と同様である。しかし、「額に白い斑点があり、右前脚に黒い毛があり、全身は褐色の生き物」と記憶するより、これを「ウマ」という一つの表象にすることの利点があるだろう、という予測が正しいとする確信は、ヒト側、しかも現代人の脳でしか成り立たないはずである。

もしその確信も言語知能によって生じたもの（旧石器時代の言語を持たないヒトにさえ無かったもの）であるならば、「何かを表象にすることの利点」は「言語知能の萌芽のトリガー」にはならない。逆に、「言語知能の高度化」が、直観像記憶を忘却していない人間を除く大多数の人間に、「何かを表象にすることの利点」を創作させたと見るほうが正しいだろう。

従って、私が述べてきたような踏み込み方をしない限り、「トレードオフ仮説や類似の説の正当性の確信それ自体の正当化」のためにこそ、「言語知能の萌芽のトリガー」に「表象にすることの利点」を置いた可能性が、残されてしまうのである。恐ろしいかな、これは人間の脳がほとんど無意識に行ってしまう作業なのである。

私の視点は、厳しいようだが、一見普遍性を持ちそうな「トレードオフ仮説」も、直観像記憶を失った現代の社会的人間が、他の動物を支配する方便や、現代社会に安住する口実として思いつき、納得しているにすぎないものである可能性がある、というものである。私の経験上、「トレードオフ仮説」や類似の説に納得して済んでい

る研究者当人たちは、その方便や口実の原理に気づいていないか、否定することが多い。それは、学説を世に出して業績を上げるべき立場にある以上、仕方のない面もあるかもしれない。

しかし私は、ヒトのあるべき本来的生物的状态とは、むしろ、直観像記憶、すなわち、私がほぼ同義だと考えるベルクソンの「純粹知覚」のほうを基盤とし、いわば実存の故郷として、その上に言語知能を付加していく生き方であると、今でも考えている。